

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 113 号
2020年 6月

西吾妻登山道保全誘導ロープ設置ボランティア

6月8日と12日に西吾妻登山道保全誘導ロープ設置ボランティア作業を行いました。当該山域での誘導ロープ設置作業は2000年から当会の事業として取り組んできたものですが、近年、参加者も年を重ねるとともに体力的な困難さが増してきていました。そして何よりも、山岳の自然環境を守るためには保全作業を長期的に継続することが必要であることから、この作業は次世代に引き継がなければなりません。この差し迫った課題を解決するために、今年は幹事が所属する東北山岳ガイド協会に協力をお願いするとともに、作業ボランティアを一般公募することにしました。今回は作業エリアを西大巔と西吾妻小屋西側湿原に分け、6月8日(月)と13日(土)での公募としました。福島民報新聞と福島民友新聞に一般公募の告知掲載を依頼しましたが、新聞社のネット配信が功を奏して、予想以上の方から応募がありました。山岳での作業であることと次世代への継承の目的から50代以下に年齢を制限させていただくことにしましたが、それでも20名近くの方から応募がありました。ボランティア作業の日程については裏磐梯自然保護官事務所と環境省東北環境事務所にもお知らせしました。

6月8日は東北山岳ガイド協会の支援を受けることになっていましたが、更に、東北環境事務所長と裏磐梯自然保護官事務所国立公園管理官も参加されました。新潟市から参加された方を含め一般公募応募者4名、東北山岳ガイド協会4名が加わり13名での作業となりました。西大巔は山頂から水場までは斜面崩壊が進行中であり、その状況について



2020年6月8日西大巔山頂

資料を用意し、参加者に説明しました。作業は、2班に分かれて行いましたが、曲がった鉄杭を補修する技術を持った方がおり、当初、荷下げする予定の鉄杭は全て再生活用することができました。

6月13日は予備日の14日も含め降雨の予報であったため、急遽12日(金)に日程を変更し、また天候の急変も予想されたため、天元台から入山することになりました。そのため、8名の応募された方の都合がつかず参加できませんでした。12日は当会会員6名に一般公募応募者3名が加わり9名での作業となりました。天元台では雨が降っていましたが、リフト運航時には雨もやみ、行動中は時々晴れ間ものぞき、順調に作業を終えることができました。一般参加者のうち2名の方は8日に続いての参加とあって、連携作業も円滑に進み、予定より早く湿原での作業を終えることができましたので、いつも一緒に共同作業をしているネイチャーフロント米沢に連携の気持ちを込めて若女平分岐湿原でのロープ設置作業も行いました。



2020年6月12日若女平分岐



しっかり打ち込み



手際よく作業



鉄杭補修は任せて



コミュニケーションも大事

今回、初めての一般公募でしたが、思わぬ参加者がありました。福島市を拠点にタレント活動をしている「なすび」さんです。「なすび」さんは、エベレストに登頂された方として知られていますが、西吾妻登山道保全ボランティア作業に参加されるとは予想しておらず、応募時も実名でしたので 8 日に登山口のミーティングでお顔を拝見して似た方がいると思い、本人に確認するまで全く気づきませんでした。「なすび」さんには、2 日間とも参加していただきました。その上、他の参加者より重い荷物を担ぎ、杭の打ちこみ作業も一身にいただき大変助かりました。

公募では多くの方々と連携のきっかけを作ることができ、西吾妻山域の登山道保全活動も新しい段階に入ったことを実感しました。今回の経験を是非、今後に活かしていきたいと思います。

初めて、西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティアに参加して 丹治芳廣



大凹を通過

全く初めての投稿ですので、自己紹介から始めさせていただきます。

福島市渡利在住で、現在65歳です。仕事は、県職員として農業改良普及事業(米の振興)に携わり、退職後は、国見町役場で農業の担い手育成に取り組んできました。この仕事を中心とした生活も6月30日で国見町役場を退職することになっており、新たな生活が始まる状況です。山行は、県職員に成り立ての頃職場の先輩に連れられて会津の山に登ったのが初めてで、結婚後二十数年のブランクを経て、現在は県内の山に月1~2回登る程度です。

このような状況の中で、6月12日、ボランティア活動として初めて、西吾妻登山道誘導ロープ

設置活動に参加しました。高山の原生林を守る会の活動には、5月26日の花塚山放射線量調査に始めて参加しましたので、会活動への参加は2回目になりました。

ロープ設置のボランティア活動に参加して感じたことは、思ったよりハードな活動であった事です。山登りを普通のコースタイムでこなし、プラスしてロープ設置の作業をすることは、思ったより体力を使うものだと感じました。六十半ばの身にはちょっと響くところがありました。また、そこで割り当てられた作業が「ロープ連結・設置」であり、杭にロープを縛り付けるやり方を説明されても一度ではわからず、何度も失敗しながら教えてもらう状況でした。ちょっとストレスになり苦手意識ができそうで、同行したした方からの「2mぐらいのロープを購入して家で練習すると良い」の言葉に全くの納得でした。もうひとつ感じたことは、ロープ設置を行ったところは湿原のところが多く、その道は雨水に削られ表層の泥炭、その下の赤い粘土、そして基盤となっていると思われる岩石が表れているところが結構見られ、小さな面積ですが人為による環境破壊が進んでいることを感じさせられました。少しでも状況の悪化をなくするためにロープを張り、足を踏み入れる場所を限定する事の重要性を感じさせられました。

今回のロープ設置へのボランティア活動に H さんが参加しており、車に同乗したものの H さんの情報を聞いていなかったため最初は「なすび」さんとは気が付かず簡単な日常会話しかしていませんでした。その人が「なすび」と分かった後、エベレスト登頂に4度挑戦した話を詳しく聞くことが出来、「思い」と「機会」と「支援」により素晴らしい実績を上げ、福島にひとつの元気を与えてきた事がわかりました。その語り口から、有名人に有り勝ちな自分を前面に売り出す態度とは違い、静かに淡々とボランティア活動を行う姿に感銘を受けました。

いろんな人達との出会いがある会の活動の素晴らしさを感じました。今後とも時間の許す限り活動に参加させて頂ければと思っております。宜しく願いいたします。



打ち込み作業



ロープ設置作業



若女平分岐湿原での作業

第 169 回自然観察会 つれづれなるままに 山口 嵩

4月12日は終日曇り、気温は午後になり漸く二桁台との天気予報。風もありそうなので少し厚着の出立で「小鳥の森」へ向かった。



昼食を終えて(マスクをつけますか)

空模様は、消炭色からスカイ・ブルーに変わり、風もない絶好の観察日和。稀になった在来種カントウタンポポの鮮やかな「黄」が目にと染みた。

スマレが今回のメインであったが、全てが同様に映る小生にとっては判別ままならず、配布された資料やスマレ類早見表を片手に悪戦苦闘。ルーペや図鑑を手に語り合う諸姉姉の話を聞きながらナガハシスマレ・ニオイスマレ・タチツボスマレの違いを何とか見分けることが出来た。

樹木類では大葉夜叉五倍子と夜叉五倍子の違い、アオモダでは実際に水を掛けると樹肌がより青くなり和名に納得。馬酔木はわが庭にもあり、説明を耳に改めて親しみを覚えた。

帰途は予定どおり15時頃であったが、これまでの無風状態が一変、時おり吹き来る突風で周辺は一面の花吹雪、先が見とおせない程の花弁の舞いは初体験であった。

締めミーティングでは、代表から「今日観察したスマレは何種類か。」との質問。解答は命名がされていない交雑種一種を入れて11種でした。

新型コロナの影響から開催が危ぶまれた観察会であったが14名が参加、自然に包まれて心身ともにリフレッシュできた一日であった。

佐藤代表より今回のテーマである「春の息吹」の観察ポイントや行程等の解説を受け、ネイチャー・センター近くの観察会開始地点(シジュウカラの小径)へと足をを進める。集合場所から僅か数百メートルであったが、三三五五の勉強会で30分以上費やす。これも観察会の醍醐味であろう。

出発点からのなだらかな登り道を進み程なく左折カワセミの小径へ、各種のスマレや猩猩袴等を眺めながらトンボ池を過ぎるとカタクリの群生地、最盛期は過ぎていたが、雲間から差し込む仄かな光を受けて紅紫色の花々が晩春を奏でるようである。懸念された



マキノスマレ



ニオイタチツボスマレ



身体が喜んでます



柔らかい春の陽射しが心地よい



ノジスマレ

もりびとノート

小鳥の森観察会はマスコミでの新型コロナ報道が増えてきた時期に実施されました。密閉、密接、密集の「三密」という国から示されたガイドラインが独り歩きしている時期でした。自然観察会も「三密」に該当するという解釈までありました。そんな中で開催された観察会参加者に、新型コロナをどのように受け止めて参加されたかを聞いてみました。参加者の声です。

- ・コロナを意識することなく参加した（2）
- ・正直、参加するかどうか迷いながら参加した。
- ・コロナで内に籠るよりも、健全な外に出たい
- ・週に2～3日は山を歩いている。この観察会もいつもの通り
- ・家に居るので気分転換に
- ・家に高齢者がいるので、たまには外へ
- ・行事が中止にされて家に居ることが多くなったので外へ出て、
- ・家でテレビはコロナばかり、自然の中で楽しく過ごしたい

今は、自然観察会が「三密」に該当すると解釈する方はいないと思いますが、福島原発事故と同様に「客観的な根拠」を持って正しく警戒することが、偏見や差別を生まないために必要ではないでしょうか。あなたは「根拠のないどんぶり勘定」に踊らされていませんか（もりびと）。



身体のものさし1 ～深い息が感度を上げる～ 土井 昇

何より深く息をすることが快い。深く息が入るにしたがって、気が隅々まで行きわたり、覚醒して全身がまとまる。そして行動する。ゆっくり吐ききる息で緊張の糸が解かれて、身体は部分、部分に戻って静かに休むことができる。休息と補いが得られるとまた行動したくなる。その一方で、息を詰めっぱなしで物事に当たったり、浅い息で過ごすとは休息のできない体になってしまう。めりはりのある生活のためのスイッチを呼吸が握っている。

一日の調子は朝で決まる。身体各部分がばらばらのまま起きると、歪んだり傾いたりした形が一日続くようにセットされてしまう。骨盤が歪むと手や足にも無理がいきトラブルの原因になり、呼吸と動作が合わないとギクグリ腰になる。循環不良や内臓への負担をも招く。したがって朝の起き方から身体感覚を育てていくのが自然であるし、取り組み易い。その一例を紹介させていただく。

では、眼が覚めた瞬間からイメージしてほしい。次第に覚醒に向かい自分が眠っていたことを思い出す。ここからが大切。目をつぶったまま仰向けで息を入れていき、だんだん身体の隅々に気がわたっていく。続けていくうちに大きく息が入ってくるようになるので、それを下腹へ落とし込んで身体が一つにまとまった感じを確かめられたら息を抜かず起き、開眼する。その後、私は経絡体操をするが、ストレッチでも構わない。ゆっくり身体を感じながら行えばいい。どこかおかしいと感じたら最近の自分の暮らし方を振り返り、冷え、無理、眼の酷使、食べ過ぎ、寝不足、姿勢・・・そこから身体を調べていく行動には手ごたえを感じると思う。

15分程のこの習慣によって身体感覚が鋭敏になると、変調を早めに感知でき、身体の望まない方向へのブレーキがかかって良い方向へと導いてくれる。また、必要と思えば検温も行う。太陽の高い昼には体温が上がり、朝夕はやや低い。朝より夕方が1℃程高いのは炎症があるサイン。足裏を合わせる検温では25℃以下は病気か体調不良。20℃以下は慢性疾患があってもおかしくないレベルだ。腋窩でも左右差が出たり、右足のみ低温という人もいた。身体の有機性が失われつつあるようだ。うちがわに感覚のものさしが出来ていれば対処も適切で、改善度合いもチェックできる。

朝の起き方は自分の身体への挨拶であり、対話である。面倒なところか息を育て感度を上げていく喜びが静かに満ちてくる時間である。「人は病気で死ぬのではなく、次の行が来ないから死ぬ」と整体の師が話していた。人生もここまで来たら休もうかと身体が感じた時には、死もまた身体からの要求として選ばれてゆくものなのだろう。自分以外の世界の全てに親しく挨拶して訣れることのできる時の訪れと重なって。



取敢えず深呼吸しましょう

東北ブナ紀行（73）

奥田 博

鬼首高原と呼ばれる一帯には、荒雄岳を中心に、須金岳、禿岳、大柴山、花淵山などの外輪山が囲むように連なる。標高が低いにも関わらず、素晴らしいブナ林と森林限界を越えた風景を楽しむことができる。

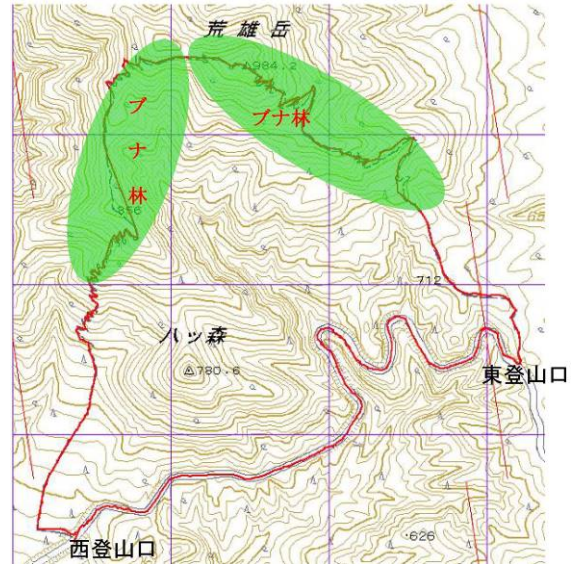
111) 荒雄岳 984m

荒雄岳は標高こそ千々に満たないが鬼首カルデラの中央火口丘である。周辺には多くの温泉が湧き、間欠泉や片山地獄と呼ばれる火山噴気も多くみられる。外輪の山から荒雄岳を望むと、環状盆地に囲まれて中央火口丘であることが良く分かる。阿蘇山には遠く及ばないが、ミニ・カルデラの風景が確かに広がる。

火山活動から長い時間を経た荒雄岳は、すっかりブナに覆われた山に変身している。西登山口に車を停めて林道のあるいて東登山口へ、ここから登山道に入る。しばらく登ると周囲はブナの森に囲まれる。古木から若木まで、うまく世代が混在している様子が見えてくる。急坂を越えると山頂到着でした。山頂からは北面が開けており、栗駒山が望めた。

下山の尾根も、ブナの森の中をたどる。尾根をわたる風が涼しく感じられるのも、ブナの森の魅力だろう。長い急坂を下ると、杉林となり登山を終えた。

コースタイム：西登山口(40分) 東登山口(1時間) 山頂(50分) 西登山口

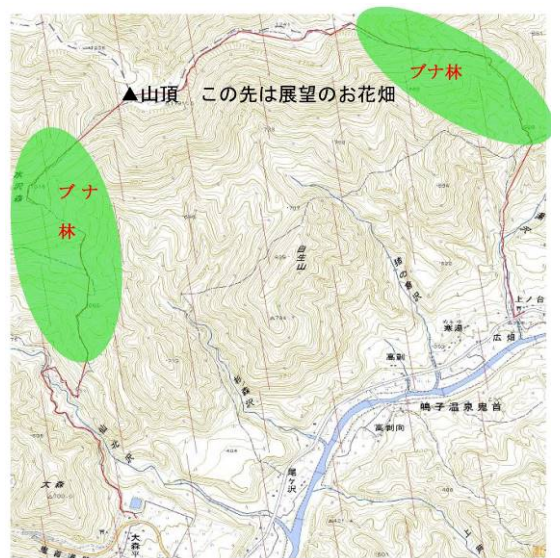


112) 須金岳 1253m

鬼首カルデラの外輪山の一峰であるが、須金山を下から見ると、どこが山頂か分からないほど平らな高原が東西に広がっている。この西端に山頂はあるが、山容は穏やかな高原の印象を持つ。

東側の登山口から山頂までは標高差千々に越えるため、侮ってはいけない。沢を越えて尾根にたどり着くと、ブナやヒメコマツの森を登るようになる。次第にブナの大木があちこちに見られるようになる。途中には倒木が道を塞いでいたのを鋸で破断されたブナが横たわっていた。樹齢150年で天寿全うした感がある。さらに登ると、ブナの新芽である双葉が登山道を埋めつくすように顔を出していた。次の世代が育って、森が更新されてゆく新旧を垣間見たように思った。山頂稜線はお花畑で、展望良好。下山も長いブナの森を下っていった。

コースタイム：仙北沢登山口(2時間) 水沢盛(40分) 山頂(40分) 九合目(2時間) 寒湯沢登山口



須金岳途中の倒木ブナとたくさんのブナ双葉(小写真)

荒雄岳では古木から若木まで、うまく世代が混在している



吾妻・安達太良花紀行 81

佐藤 守

カンボク (*Viburnum opulus* レンブクソウ科ガマズミ属)

西吾妻山麓のコナラ・ミズナラ林の沢や湿原周辺の湿生地に植生する落葉低木。吾妻・安達太良山域に植生するガマズミ属の樹木の中で本種とケナシヤブデマリは冷涼で湿潤な環境を好むのか植生地が限られている。カンボクは磐梯山 1100mから西吾妻 800mのエリアで特異的に多く分布する。ケナシヤブデマリと並んで装飾花の純白さが際立つ。一方で、別名クサギともいわれ、試したことはないが、材は燃やすと悪臭を放ち、果実もアルコールに漬けると悪臭を放つという。美しい花の姿からは想像もつかない特性を持つ不思議な樹木である。

葉は対生。葉身は3裂し、中央の裂片が長い。各裂片の先端は尖る。葉縁は粗い鋸歯がある。成木では新梢の先端の葉は3裂せず長卵形の葉が見られる。実生では先端の葉は暗紅色を帯び成葉化するに従い退色する。先端部の葉は鋸歯を持たないが樹の成長とともに鋸歯が発達する。葉の表面と葉柄は無毛であるが葉の裏面には全面に毛じが着生する。ガマズミ属の樹木で葉が裂片を持つのはカンボクのみであるため葉で識別できる。

花は頂生、新梢の頂部に散房花序を着生する。花序は円形に近く、周辺は大型の純白の装飾花で覆われる。装飾花は両性花の花弁が大型化し雄しべと雌しべが退化したもので5弁の裏側に緑色のガクがある。これに対し、アジサイ属の装飾花はガク片が大型化したものである。装飾花は開花始めの頃は緑色を帯び、やがて純白になる。中央部には両性花が多数ついている。両性花の花弁は5片で黄色を帯びる。雄しべは5個、雌しべは1個である。満開期の樹姿は新葉を背景に純白の装飾花の輪が樹冠全体を覆い、美しく気品がある。ある植物学者はその姿を雪に例えたが、言いえて妙である。

果実は核果で果肉は水分を含む。果皮は鮮赤色で美しい。毒はないが、晩秋になっても鳥にも食べられず。晩秋の森を彩るよい飾りものになっている。しかし、年が明けて、2、3月頃になると鳥に食べられるのか、僅かな残り果を留めるだけになる。霜によって果実の成分が変化するのか、他に餌がなくなってしまうためなのか不明であるが、この時期の野鳥にとってはいい保存食なのかもしれない。



ミヤマガマズミ (*Viburnum wrightii* レンブクソウ科ガマズミ属)

吾妻・安達太良連峰のコナラ林からミズナラ林にかけての林縁に植生する落葉低木。ガマズミと同様に装飾花を持たない樹木である。ガマズミはミヤマガマズミより低地の里山に植生するが、一部の山域では分布が重なる。阿武隈山地に分布するコバノガマズミは吾妻・安達太良連峰では見られないが、福島市にはこの三種が植生する山域が存在する。果実はカンボクとは対照的で成熟すると甘酸っぱく、古来より利用されてきたことからガマズミは「神の実」から由来したとの説もある。

葉は対生。葉形は倒卵形で葉先は急に細くなり尖る。葉縁に浅い三角形の鋸歯がある。葉柄は赤みを帯びることが多く、長毛が散生する。葉脈は表面で窪み裏面で筋状となる。側脈は6-9対あり、葉の縁までほぼまっすぐに伸びる。葉の裏面下部の縁には1-4対の腺点がある。これに対し、ガマズミは先が突出せず葉幅が広く、卵形から丸みを帯びた台形で表裏とも全面に毛が生える。特に葉脈は長い毛に覆われる。葉柄にも粗毛が多い。花を着生しない枝の葉は特に丸みを帯びる。

花は頂生。新梢の頂部に散房花序を着生する。花序の軸や小花柄には長い毛がまばらに生え、星状毛がまじる。小花は合弁花で花冠は5中裂して平開する。花冠裂片表面は浅く筋が入り、厚みを感じさせる。雄しべは5個、花冠より長くつきでる。花柱は1個で太くごく短い。柱頭は半透明。萼片は5個でごく小さい。開花期は、ガマズミより7日から10日程度早い。

花冠裂片表面が柔らかく凹凸に富むため、光が散乱されるのか花の写真を撮影すると花が白く抜けやすく、それに合わせて露出を調整すると葉が黒くなりすぎてしまうことが多く、葉と花の同時撮影がなかなか難しい。それでも訪花昆虫には人気があるようで、独特の香りを放つ頃には、ハナカミキリ類はじめ多くの虫たちで白い花絨毯の上で賑わっている。虫たちは「三密」より蜜を優先するのだろう。



自然保護の話題

消えた生物多様性の宝庫、マタ・アトランティカ

マタ・アトランティカは、ブラジルの大西洋側、北はピアウイ州から、南はリオ・グランデ・ド・スール州まで、ブラジルの大西洋の海岸線に沿って約 5,000 km、17 州にまたがり分布するブラジル大西洋岸森林のことである。森林域は海岸沿いのみならず、ブラジル内陸からパラグアイ及びアルゼンチンの国境まで広がっていた。ブラジル発見当時(1500 年)、マタ・アトランティカの面積は 130 万 km² で、現在のブラジル全国土の 15% を占めていたと推定されている。布地用の赤い染料抽出を目的としたブラジルボク(Caesalpiniaechinata)の大量伐採、ゴールドラッシュ、コーヒ栽培、牧場経営の隆盛による農地拡大のための伐採等により、マタ・アトランティカの現在の面積は、当初の面積(130 万 km²)の 8%(約 10 万 km²)までに減少してしまったと推定されている。

現在残っているマタ・アトランティカは、リオデジャネイロ、サンパウロ、パラナ、サンタカタリナ諸州の海岸沿いに集中している原生林に近い熱帯降雨林で、この森林が現在も残っている主な理由は、地形が急峻で農地、牧場に適さなかったことにある。この地域を中心にマタ・アトランティカには約 20 万種の生物が生存し、植物だけでも 25,000 種以上あるといわれている。植物の生物多様性が地球上で最も高いのは、密度の面ではアマゾンではなくマタ・アトランティカだといわれている[海外の森林と林業 No. 84 (2012)p.21-26 より引用]。一例として、日本には存在しない小さなラン植物マイクロランの種数は世界最多で、まだ未発見の種もあるとされている。

福島市では信夫山や先達山で公園開発や自然エネルギーの活用と称する太陽光発電所の設置が計画されている。特に太陽光発電については 60ha にも及ぶ森林を伐採して設置するものである。地元経済の活性化を目的とするためなのだという。その経済論理の積み重ねがマタ・アトランティカの滅亡を招き、深刻な種の多様性の危機を招いていることにそろそろ気づくべきではないだろうか。今回の新型コロナ禍を招いたのも旧態依然たるパラダイムが背景にあるとの思いを強くしている(もりびと)。



僅かに残るマタ・アトランティカ

第 171 回自然観察会案内：姥ヶ原の高原植物観察会

日時：2020 年 7 月 5 日 (日) 8:00~16:00

集合場所・集合時間 四季の里正面入り口駐車場(吾妻橋側) 8:00 または 兎平駐車場 9:00

参加定員 20 名

内容 浄土平から姥ヶ原草原を周回し、夏の高山植物の花を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、マスク

* 装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用: 保険代(500 円)

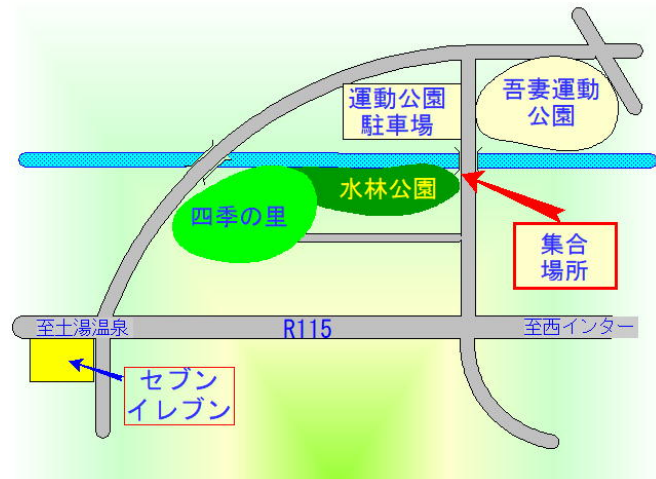
申し込み:

7 月 3 日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後 7 時~9 時でお願いします)。

兎平駐車場に直接、行かれる方は申込時にお知らせください

新型コロナウイルス感染を避けるため以下の点に留意してください。

- ・自宅を出る前に体調の悪い場合は、無理しないでキャンセルの連絡をください。
- ・自宅を出る前に検温をお願いします。
- ・マスクをご持参願います。



振込による会費の納入は、郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第113号 2020年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP: <http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時~9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田